



## ネルヴァルの作品におけるディオラマの意味

著者	間瀬 玲子
雑誌名	筑紫女学園大学研究紀要
号	14
ページ	29-37
発行年	2019-01-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1219/00000978/">http://id.nii.ac.jp/1219/00000978/</a>

# ネルヴァルの作品におけるディオラマの意味

間 瀬 玲 子

La signification du diorama chez les œuvres de Nerval

Reiko MASE

筑紫女学園大学研究紀要 第14号別刷

2019年1月

福岡県太宰府市石坂

Reprinted from *Journal of Chikushi Jogakuen University*

No. 14, pp. 29 – 37, January 2019

Ishizaka, Dazaifu-shi,

Fukuoka-ken, Japan

# ネルヴァルの作品におけるディオラマの意味

間 瀬 玲 子

## La signification du diorama chez les œuvres de Nerval

Reiko MASE

### I. 序

19世紀フランスの作家ジェラルド・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval は職業として劇評を多数執筆した。ネルヴァルはその中で19世紀に流行した視覚芸術の一つであるディオラマに関する評論を『アルチスト』*L'Artiste* 誌1844年9月15日号に発表した。この評論に関して過去に論じたことがある。(1)ネルヴァルはこの劇評においてディオラマの思想的背景として数多くの作家の名前及び作品を列挙した。本論文ではネルヴァルが言及した作家及び作品の中でラマルチーヌ Lamartine (1790~1869) の『天使の失墜』*La chute d'un ange* を題材とし、ネルヴァルにとってディオラマとは何であるかを考察したいと考えている。なお過去にラマルチーヌがネルヴァルに与えた影響について論じたことがある。(2)

### II. デイオラマとは何か

19世紀初頭にフランス人写真発明家ルイ・ダゲール Louis Daguerre とブートン Bouton が開発した投影装置がディオラマ diorama である。非常によく知られていることであるがディオラマの来歴を再確認してみよう。2017年6月14日から9月10日までパリのパレ・ド・トーキョー Palais de Tokyo で「ディオラマ」展が開催された。この開催に伴い刊行された図録においてエルキ・ヒュータモ氏 Erkki Huhtamo は次のように書いている。

Le Diorama de Paris ouvre ses portes le 11 juillet 1822 au 4 rue Sanson (à l'angle de la place du Château -d'Eau, près de l'actuelle place de la République) et il fonctionnera jusqu'à sa destruction par un incendie en 1839, l'année même où l'on annonce l'invention du dagerréotype. (3)

パリのディオラマは1822年7月11日にサンソン通り4番（現在のレピュブリック広場の近く、貯水塔広場の角）に開館する、そしてディオラマは1839年の火災による破壊まで機能する、まさにその年にダゲレオタイプの発明が知らされる。

ここで問題となるのが上記の引用文に出てくるダゲレオタイプである。ダゲールは1839年に『ダゲレオタイプとディオラマの方法の沿革と描写』*Historique et description des procédés du daguerréotype et description* を発表した。(4)本書籍にはダゲレオタイプの設計図の図版が多数掲載されているがわかり易いとは言い難い。注に紹介したように本書は幸いにも日本語訳が刊行されている。中崎昌雄氏は日本語訳の第1部に解説、第2部に翻訳を掲載している。『ダゲレオタイプとディオラマの方法の沿革と描写』は1種類ではなくて、1839年だけでも8種類の本が出版されている。本論文を執筆するために入手した本書の電子テキストと2017年に刊行されたディオラマ展の図録に収録されたダゲールの文章に掲載された書籍の表紙を比べると、出版社は同じでありながら、本屋名が違う。なおこの書籍の主たるテーマは写真技術のダゲレオタイプであり、ディオラマはあくまで付け足しである。

中崎氏の解説には非常に重要な事がいくつか書かれている。ディオラマはダゲールの発明ではない。ディオラマを大規模な見世物として観衆に提供したのがダゲールである。上記の引用のように1822年7月11日にディオラマ館を開館した。ダゲールはその後写真研究とディオラマを同時に行っていた。

『ダゲレオタイプとディオラマの方法の沿革と描写』の最後には「ダゲール氏によって発明され、ディオラマの絵に彼自身によって応用された絵画と照明の方法の描写」*Description des procédés de peinture et l'éclairage inventés par Daguerre, et appliqués par lui aux tableaux du diorama* という章がある。(5)ダゲールはディオラマの演目として「真夜中のミサ」*Messe de minuit* 「ゴルドウ溪谷の山崩れ」*Éboulement dans la vallée de Goldau* 「ソロモンの宮殿」*Temple de Salomon* 「モントリオール・サン・マリ寺院」*Basilique de Sainte-Marie de Montréal* の4つを列挙している。ネルヴァールはこの4つの演目に関して劇評で言及した事はない。(6)

さて次にフランス国立図書館電子テキストサイト Gallica にディオラマ館の図版が収録されていることを紹介しよう。題名は『給水塔の眺め』*Vue du Châtau d'Eau* である。1822年に出版され、ペンによるデッサンかつ墨の淡彩画法であると Gallica には書かれている。作者名は書かれていない。この作品の中央にはディオラマ館が描かれている。そしてディオラマ館の前には非常に大きな給水塔がある。そして左右には建物があり、給水塔の前にはかなり多数の人々が描かれている。フランス語の題名を日本語に訳すと給水塔となる。しかしこの図版を見ると、巨大な泉のように見える。前面に2頭の動物の彫像、左右に1頭ずつの動物の彫像があり、口から水が出ている。また他の部分からも溢れるほどの水が流れている。台を広げて数人が何らかの行為をしている。また輪遊びをしている子どももいる。(7)

建築面からアプローチした書籍も存在する。アレクシス・ドネ Alexis Donnet の『パリの建築物描写または歴史的比較』*Architectonographie des théâtres de Paris, ou Parallèle historique* (全2巻)の1巻目に「ディオラマ」という章があり概説が書かれている。特に目新しい事は書かれていない(8)重要なのは2巻本の中の2巻目(別巻)である。なお全ページ白黒である。ページは書かれていないが図版23 PL. 23と書かれている図版は *Diorama et Wauxhall* 「ディオラマとヴォーアル」のためのページである。ABCDEF にはディオラマの構造に関する単語が書かれている。

左上の図版には「ディオラマの立面図」Élevation du diorama と書かれて入る。建物を横から見た図である。ディオラマ館が横長であることがわかる。廉価版ではわかりにくいだが、電子版を拡大すると細部までよく見えて非常に便利である。右上の図には「A、B線上のディオラマの断面図」Coupe du Diorama sur la ligne A, B と書いてある。Aは「部屋の中心」Pivot de la Salle, Bは「回転の動きを生み出す歯車」Engrenage donnant le mouvement de rotation である。この図によりディオラマがどのように動かされていたかがよくわかる。真ん中の図は「C、A、D線上の立面図」Coupe du Diorama sur la ligne C, A, D と書かれている。Cは「キャストを支える傾斜図」Plan incliné portant les Galets, Dは「画面」である。この図も電子版を拡大するとその構造が非常によくわかる。残りのFは「サービスの回廊」Galleries de service (図面を拡大し、1が二つ書かれている事を確認した)、Gは「光を修正させる枠の置き場所」Emplacement des chassis modificateur de la lumière である。そして右下の図は「ディオラマ室の内部の景観」Vue intérieur de la salle du Diorama である。これによって客席からどのようにディオラマを見ていたかがよくわかる。この図の下には目盛りがついていて、ディオラマ館の内部の大きさがわかるようになっている。そして左下には平面図が掲載されている。平面図の右に説明がある。Aは「回転室」Salle Tournante, Bは「舞台最前部」Avant-scène, F, Gは「画面の広がり」Etendue des Tableau, Hは入り口Entrée, Iは「収納部」Logement である。この図にも目盛りがついている。これにより、ディオラマ館の大きさがわかるようになっている。そしてディオラマ館の上にサンソン通りがあり、その上に「ヴォーアール」という建物の平面図が書かれている。ドネの著作の説明によると、ダンスのための館であり、1779年に建設された。(9)

次に19世紀に刊行されたディオラマに関する研究書を紹介する。それはジェルマン・バプスト Germain Bapst の *Essai sur l'Histoire des panoramas et des dioramas* 『パノラマとディオラマの歴史に関する試論』である。本書では年号の記載に間違いもあるのでその点は気をつける必要がある。本書には1830年頃に演目『大洪水』 *Le déluge* が上演されたと書かれている。(10)この演目がネルヴァールが『アルチスト』誌1844年9月25日号に掲載したディオラマ論で論じた『大洪水』と全く同じ内容であるかどうかは定かではない。ただし『1830年興行年鑑』 *Almanach des spectacles pour 1830* にも同様に次のように書かれている。

Diorama

*Derrière le Château- d'Eau.*

Depuis dix heures du matin jusqu'à cinq heures du soir.

Vue du *Déluge*, peinte par M. *Daguerre*, et celle de *Campo-Santo*, par M. *Bouton*.

Prix : Balcon, 3 fr. Amphithéâtre, 2 fr.50 c. (11)

ディオラマ

給水塔の後ろ

朝の10時から夕方5時まで

ダゲール氏によって描かれた『大洪水』の景観、ブートン氏によって描かれた『カンポーサント』の景観

値段：バルコニー席、3フラン。 舞台正面の階段棧敷、2フラン50サンチム

このように1830年には『大洪水』という題名のディオラマが上演されたことは確かである。しかも席に2種類あり、値段が違っていても明らかになった。また前年である1829年にすでに『大洪水』が上演されたという証拠もある。非常に残念なことに1844年の『興行年鑑』を現時点では入手していない。よって1844年にネルヴァルが鑑賞し、評論を書いたディオラマとの比較をすることができない。

すでに述べたようにディオラマ館は1839年に焼失し、後にボンヌ＝ヌヴェル大通り18番地、18 boulevard Bonne Nouvelle に再建される。しかしそれも1849年に焼失した。その後ディオラマ館は再建されなかった。

時は遡り、ダゲールは1842年にパリ近郊のブリ＝シュル＝マルヌの教会に彼のディオラマを設置した。この教会はサン＝ジェルヴェ＝サン＝プロテ・ドゥ・ブリ＝シュル＝マルヌ Église Saint-Gervais-Saint-Prottais de Bry-sur-Marne という名前である。ダゲールの最後でかつ現存するディオラマを所有していることで有名な教会である。ギヨーム・ル＝ガル氏 Guillaume Le Gall の論文が上記のパノラマ展の図録に掲載されている。(12)この論文によると、1842年6月19日に公開が始まったディオラマがダゲールの最後の作品だとのことである。ダゲールのサインが入り、見ることができるディオラマは他に存在しない。しかし修復作業をしたにも関わらず、元の状態とは違うとのことである。なおこの図録にはダゲールのディオラマの図版がカラー版で掲載されている。カンバス上の油絵で、縦535センチ、横605センチの大きさである。ダゲールが教会内部を最後の作品に選んだ事は意義深いと考えている。またすでに言及した『ダゲレオタイプとディオラマの方法の沿革と描写』の日本語訳の『完訳 ダゲレオタイプ教本』に収録された中崎昌雄氏の解説のページにもこのディオラマ制作の経緯がかなり詳しく書かれている。(13)中崎氏は歴史家であり、考古学者であったアドリアン・マンチエンヌ (1841-1927) の著作を参考文献に挙げている。マンチエンヌはブリ＝シュル＝マルヌの市長を務めた人である。彼はこの地で生まれ、かつ亡くなっている。この著作を実際に読むと、ダゲールがこの地で非常に幸福な時を過ごしたことがよく理解できる。(14)

以上がディオラマに関する文献、図版及び研究書の紹介である。ネルヴァルが劇評家として活躍していた時代のディオラマは見世物であった。それを演劇、オペラ、バレエと同等、またはそれ以上にネルヴァルが論じた事は特記すべきことだと考えている。ネルヴァルはディオラマに特別な感動を覚え、彼が持つ宗教観と結びつけたと考えている。この点は他の劇評家または作家とは決定的に違うと考えている。

### Ⅲ. ネルヴァルのディオラマ論におけるラマルチャーヌに関する描写

すでに述べたようにネルヴァルは『アルチスト』誌1844年9月15日号にディオラマに関する評論

を発表した。ネルヴァルはこの評論において数多くの作家、著作家について言及した。過去においてそれらの人物及び作品について研究を行い、論文を発表した。ラマルチーヌがネルヴァルに与えた影響について研究を行ったこともある。しかしネルヴァルがディオラマ論においてなぜラマルチーヌを言及したのかについて研究をしたことはなかった。そこで本論文ではネルヴァルの評論の該当箇所及びラマルチーヌの作品の検証を行いたいと考えた。

ネルヴァルは『アルチスト』誌1844年9月15日号に以下のように書いている。

Parmi les livres apocryphes de la Bible, il en est un intitulé le Livre d'Énoch, qui nous a valu *Le Paradis perdu* de Milton et *La Chute d'un ange* de Lamartine. (15)

聖書外典の中で『エノク書』と題したものがあり、それは私たちにミルトンの『失樂園』やラマルチーヌの『天使の失墜』をもたらした。

聖書外典『エノク書』がネルヴァルに与えた影響は過去に研究を行ったことがある。(16)しかし本論ではラマルチーヌの作品のどの箇所がネルヴァルに影響を与えたかを主に考察したいと考えている。ネルヴァルはラマルチーヌに関して次のようにも書いている。

Lamartine, grâce à sa connaissance des sources mystiques, a fait des habitants de la ville d'Énoch des gens plus avancés que nous-mêmes dans les merveilles de la civilisation ; ils avaient trouvé jusqu'à l'art de la navigation aérienne, dont le poète explique le mécanisme fort ingénieux. (17)

ラマルチーヌは神秘的な典拠についての知識のおかげで、エノクの町の住民を文明の驚異の中で私たちよりも遥かに進んだ人々にした。彼らは空中飛行の技術まで見つけた、詩人(ラマルチーヌ)は非常に創意工夫に富んだ機械装置を説明している。

この記述に対してネルヴァルのプレイヤッド版の編者はラマルチーヌの『天使の失墜』の「8番目の幻想」箇所を指摘している。そこでラマルチーヌのプレイヤッド版から該当する箇所を引用してみよう。

Dans sa concavité légère, un appareil  
Pressait à flots cachés un mystère fluide  
Plus léger que l'éther et flottant sur le vide ;  
Du vaisseau dans les airs il élevait le poids,  
Comme sur l'Océan le soulève le bois.  
Les hommes, mesurant le moteur à la masse,

S'élevaient, s'avaissaient à leur gré dans l'espace,  
Dépassant le nuée ou rasant les hauteurs ; (18)

軽い窪みの中で、機械が  
隠れた流れに、流れるような神秘を押していた  
エーテルよりも軽く、空間の上を浮かんでいる  
大気の中で船から彼は錘を上げた  
大洋の上、彼は森を持ち上げた（注では草稿では le ではなく se と書いてあった）  
人間たちはアースでエンジンを測りながら  
空間の中を好きなように上がり、下がっていた。  
厚い雲を超え、または高みを飛びながら

確かにネルヴァルの編者が指摘したように、ラマルチーヌは『天使の失墜』において科学技術の方法を極めて詩的な手法で表現をしている。さてこれよりも遥かにはっきりしている文章を紹介したい。それはネルヴァルが1850年11月に書いたジュリアン・チュルゴン Julien Turgon の著作『気球、空の移動、その起源から今日まで』*Les Ballons, Histoire de la locomotion aérienne depuis jusqu'à nos jours* であり、パリで Plon 社から1851年に刊行された。その序文でネルヴァルは以下のように書いている。

Il est inutile de citer le passage. M. de Lamartine a décrit en vingt alexandrins un appareil composé d'un vaste soufflet soutenu par un aérostat... (19)

その一節を引用するには及ばない。ラマルチーヌ氏は気球に支えられた広大なふいごで構成された器具を20のアレクサンドランで描いた。

ネルヴァルのプレイヤッド版の編者は、上記の文章の注においてラマルチーヌの『天使の失墜』の天空の船の描写の影響を指摘している。(20)

ネルヴァルは『東方紀行』執筆に際してラマルチーヌから大きな影響を受けている。それだけではなく、ラマルチーヌの科学技術への関心にも注目していた。そしてそれがなぜだかネルヴァルの想像力の中でエノクあるいはエノクの町と結びついているのである。その点がネルヴァル独特の思考パターンだと考えられる。

#### IV. ラマルチーヌの『天使の失墜』

ここで問題となっているラマルチーヌの『天使の失墜』（1838）についての考察をしてみたい。  
(21)この作品は日本語に翻訳されたことはない。今回本論文を執筆するに際し、『天使の失墜』を熟



読した。『天使の失墜』は「お話し」Récitに始まり、第1の幻想Première Visionから第15の幻想Quinzième Visionそして最後は「エピローグ」Epilogueで終わる。「はじめに」から「エピローグ」までの随所でネルヴァルの『東方紀行』に出てくる地名、登場人物と一致する単語が登場する。『天使の失墜』を読むと、ネルヴァルの『東方紀行』の一部を読んでいるような錯覚を覚えてしまう。

かなり飛躍した考え方もかもしれないが、ネルヴァルは1844年にディオラマを鑑賞し、そこでラマルチーヌの『天使の失墜』を想起した。そこでその作品の登場人物たちを『東方紀行』に使った可能性はあると考えている。

## V. 結論

すでに序で書いたようにネルヴァルはディオラマ論で数多くの思想家、作家等の名前、作品名を列挙している。過去にネルヴァルが列挙した人物等に関して研究を行い、論文において発表した。本論文ではネルヴァルがディオラマ論で言及したラマルチーヌに集中して論じた。ネルヴァルはディオラマについて3編の評論しか発表していない。しかも本論文で論じた『アルチスト』誌に掲載した評論で言及したディオラマ「大洪水」しか論じていない。ネルヴァルが初期のディオラマを見たかどうかは定かではない。ここで言えることは「大洪水」を見た時、ネルヴァルの頭の中に数多くの作家、著作家の作品そして聖書外典『エノク書』がディオラマの場面と結びついたということである。ディオラマに限らず、演劇、オペラ、バレエを鑑賞し、それを見た観客は各々が別々の感想を抱くことはよくあることである。ネルヴァルが劇評家をしていた時代は、比較的自由に自分の感想を劇評に書くことが許されていた。すでにネルヴァルが執筆した劇評の電子テキストの大半を入手した。ネルヴァルのプレイヤッド版及び電子テキストを参考にして、ネルヴァルの文学作品生成の過程を更に研究したいと考えている。なお本論文ではミルトンの『失樂園』については論じなかった。今後の課題とする所存である。

## 注

- (1) 間瀬玲子「ネルヴァルが見たディオラマの幻想」『筑紫女学園大学紀要』第16号、2004年1月、pp.55-73.
- (2) 間瀬玲子「『東方紀行』における都市（3）—ラマルチーヌの影響—」『筑紫女学園短期大学紀要』第32号、1997年1月、pp.1-20. 間瀬玲子「『東方紀行』における都市（4）—ラマルチーヌの『東方紀行』—」『筑紫女学園短期大学紀要』第33号、1998年1月、pp.1-19.
- (3) Erkki Huhtamo, 《le diorama et les dioramas》 in Katharina Dohm, *Diorama*, Paris, Flammarion, 2017 (Extrait de Erkki Hutamo, 《Transformed by the light : the diorama and the dioramas》, in *Illusion in Motion*, Boston, MIT Press, 2013, Traduit de l'anglais par Jean-François Allain), p.34.
- (4) Louis-Jacques Mandé, *Historique et description des procédés du daguerréotype et du diorama*, Paris, Susse frères, éditeurs, Delloye, Libraire, 1839. フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica で電子テキストをダウンロードすることが可能である。注(3)で紹介したディオラマ展の図録にもこの書籍

の一部が紹介されている。また原書の表紙の図版が掲載されている。なお本論文を執筆するに際し L. J.M. ダゲール、中崎昌雄 解説・訳『完訳 ダゲレオタイプ教本』朝日パノラマ、1998年を参考にした。

- (5) *Historique et description des procédés du daguerréotype et du diorama*, pp.75-79. 『完訳 ダゲレオタイプ教本』 pp. 147-151.
- (6) 注(1)で紹介した論文で論じたように、ネルヴァルは劇評において3度ディオラマについて言及した。1度目は1844年5月3日号の『アルチスト』誌に寄稿した劇評である。この劇評においてネルヴァルは1839年に起きたディオラマ館の火災の事を詳しく書いている。(Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome I, Paris, Gallimard, coll.《Bibliothèque de la Pléiade》, 1989, p.792. 以下ネルヴァルのこの巻を PL I と略す。) プレイヤード版の編者は『プレス』紙 *La Presse*、『シエクル』誌 *Le Siècle* の1839年3月9日号、『読書室』誌 *Le Cabinet de lecture* 1839年3月10日号にディオラマ館の火災の記事が掲載されたことを指摘している。そして編者は「ネルヴァルが示している冒頭の句(引用文)が掲載されている記事を見つけることは可能ではなかった」と書いている(PL I, p. 1801)。試しに Gallica から『プレス』紙1839年3月9日号の電子テキストを入手した。その記事によると原因不明の火災が起きて、ディオラマ館が瞬間に焼けおちてしまったこと、そして亡くなった人はなく、2名が怪我をしたとのことである。ネルヴァルの引用文は『プレス』紙からのものではないことだけは確かである。「新たな災害が首都を襲いかかったばかりである」(PL I, p. 792) が何らかの記事の引用なのか、それともネルヴァル自身の言葉なのかは現時点では結論づけることはできない。
- (7) 注(3)で紹介した「ディオラマ」展の図録には『サン＝マルタン大通りからとった給水塔とディオラマ』*Vue du Château d'Eau prise du boulevard Saint-Martin et le Diorama* と題するカラーの版画が掲載されている。この図版の事を本文で書くことができないのは、ネット上で販売されている商品だからである。この版画は Gallica に収録されている図版と比較するといくつかの違いがある。カラー版の版画のディオラマ館は窓の数が多し。ディオラマ館及び左端に三色旗が掲げられている。左端には高い台があり、2名の男性が芸を見せており、かなりの人数の男女がそれを眺めている。肝心の給水塔の色が緑系であり、付近の木々の色とマッチしている。男性の圧倒的多数は紺色のコート、チョッキ、ズボンであり、ステッキを持っている。女性の服装はロングドレスであり、赤(またはピンク)、黄、緑である。またフリードリヒ・ユスティン・ベルトウツヒ Fridrich Justin Bertuch, 『ディオラマの作動を示す子ども用のカラー版書籍の図版』*Planche d'un livre illustré pour enfant montrant le fonctionnement d'un diorama* に収録されている図版が6枚掲載されている。カラー版ということもあり、ディオラマ館がどのような構造であったのかが非常によくわかる。ベルトウツヒは1747年にヴァイマルで生まれ、1822年に同地で亡くなったドイツの作家であり、かつ学芸の保護者である。外国文学の翻訳作品及び著作を残している。6枚の図版のうち、2番目は上からの平面図(白黒)、6番目は横からの断面図(白黒)である。1番目は外から見た図版(カラー)である。ディオラマ館はかなり横長である。3番目は内部構造の図版(カラー)である。客席部分に比べて、舞台裏の面積が広いことがよくわかる。4番目の図版(カラー)も内部を描いている。5番目の図版(カラー)は客席を描いている。この書籍に関しては所有している図書館等を特定していない。しかし他の書籍の図版と違い、鮮やかなカラーであることにより、ディオラマ館がどのような形態をしていたのか、観客はどのようにディオラマを見たのかが非常によくわかる貴重な資料である。(Katharina Dohm, *Diorama*, pp.38-39.)
- (8) Alexis Donnet, *Architectographie des théâtres de Paris, ou Parallèle historique*, Paris, De l'imprimerie de P.Didot l'ainé, 1821, pp.318-323. Gallica から電子テキストをダウンロードすることが可能である。第1巻及び別巻の廉価版も販売されている。Nicole Wild, *Dictionnaire des théâtres parisiens 1807-1914*, Lyon, 2012, pp.121-122の《diorama》のページにはドネの著作の別巻の図版が掲載されている。

本書には最初のディオラマ館の火災が起きたのは1839年3月8日と書かれている。そしてサンソン通りは現在 rue de la Douane と名称が変わった事も記載されている。再建された2番目のディオラマ館は広い建物の2階にあり、1849年7月14日にまた火災が起きて破壊されたことが書かれている。ただしこの2番目のディオラマ館の開館日は記載されていない。そして参考文献も列挙されている。パリの劇場を研究する際、この著作が最も参考になると考えている。ニコル・ウィルド氏はこの著作の随所でドネの著作の別巻に掲載された図版を引用している。

- (9) Alexis Donnet, *Architectographie des théâtres de Paris, ou Parallèle historique*, pp.324-327.
- (10) Germain Bapst, *Essai sur l'histoire de panoramas et des dioramas*, Paris, Imprimerie nationale, 1841, p.20.
- (11) *Almanach des spectacles pour 1830*, Paris, Barba, 1830, p.247. カンポ=サントはイタリア北部の都市名である。Arthur Pougin, *Dictionnaire historique et pittoresque du théâtre et des arts qui s'y rattachent*, Paris, Librairie de Firmin-Didot, 1885, pp.295-296の《diorama》の項目にディオラマの演目が列挙されているが、「大洪水」は記載されていない。本作品はディオラマの代表作とは言えないと考えている。1829年に「大洪水」が上演されたという証拠は『週』*La Semaine*, 1829年11月5日号の掲載記事である。「大洪水」はダゲール作だと書かれている。また『フィガロ』紙 *Figaro* 1829年11月8日号にも「ディオラマ ダゲール作 大洪水の始まり」という記事が掲載されている。この二つの記事の電子版は Gallica で入手可能である。
- (12) Guillaume Le Gall, 《Le diorama de Daguerre. L'invention de la peinture mécanique》, in Katharina Dohm, *Diorama*, pp.41-48.
- (13) 『完訳 ダゲレオタイプ教本』 p. 52.
- (14) Adrien Mentienne, *La Découverte de la photographie en 1839*, Paris, Imprimerie, Paul Dupont, 1892.
- (15) PL I, p.841. *L'Artiste, Beaux-Arts et Belles-Lettres*, 4<sup>e</sup> série – Tome II, Paris, Aux Bureaux de l'Artiste, 1844, p.46 (Gallica から電子テキストを入手した)。なお *L'Artiste* のこの巻を今後 A-4-2 と略す。本記事を訳す際に『ネルヴァル全集Ⅲ』、稲生永訳・註「ディオラマ」筑摩書房、1976年、pp. 282-290 及び『ネルヴァル全集 IV 幻視と綺想』阪口勝弘訳「ディオラマ、オデオン座」1999年、pp. 392-396及び pp. 549-551を参考にした。
- (16) 間瀬玲子「『エノク書』がネルヴァルに与えた影響」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第4号、2009年、pp. 83-94.
- (17) PL I, p.841. A-4-2, pp.46-47.
- (18) Lamartine, *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1963, pp.970-971.
- (19) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome II, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1984, p.1245. 以後 PL II と略す。
- (20) PL II, p. 1787.
- (21) フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica には M. de Lamartine, *La Chute d'un ange*, Paris, Hachette, 1870が収録されている。

(ませ れいこ：英語学科 教授)

